

平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品について

原田 憲二郎

I. はじめに

平成5年に、奈良市西木辻町において発掘調査が行われた¹⁾。平城京の条坊復原で左京五条五坊十三坪の南西隅にあたる。(図1) 検出された主な遺構には、奈良時代の十二・十三坪坪境小路(SF01)とその東側溝(SD02)、十三坪の西辺を画する溝(SD03)、平安時代の井戸(SE11)、江戸時代の土坑群(SX14)・土坑(SK15・16)がある。

調査地では、瓦類が整理箱で205箱分出土したが、大半は江戸時代の土坑群SX14からの出土である。丸瓦・平瓦が多いが、軒瓦が127点ある。軒丸瓦の内訳は6012A 1点・6091A 50点・6301B 3点・6301種別不明3点・6308B 1点・型式不明3点で、軒平瓦の内訳は6572D 1点・6663A 1点・6664 I 2点・6702F 2点・6717A 6点・6717B 36点・6717種別不明17点・6728B 1点である。このほかに小稿で取り上げる瓦製品がある。この瓦製品に関しては現在まで詳細な報告はされていないため、まずこの遺物について紹介し、その用途について考えてみたい。

II. 平城京左京五条五坊十三坪で出土した瓦製品

瓦製品はすべて破片で、江戸時代の土坑群SX14から4片、江戸時代の土坑SK15から2片の合計6片が出土し、うちSX14から出土した2片が接合した。(図2)

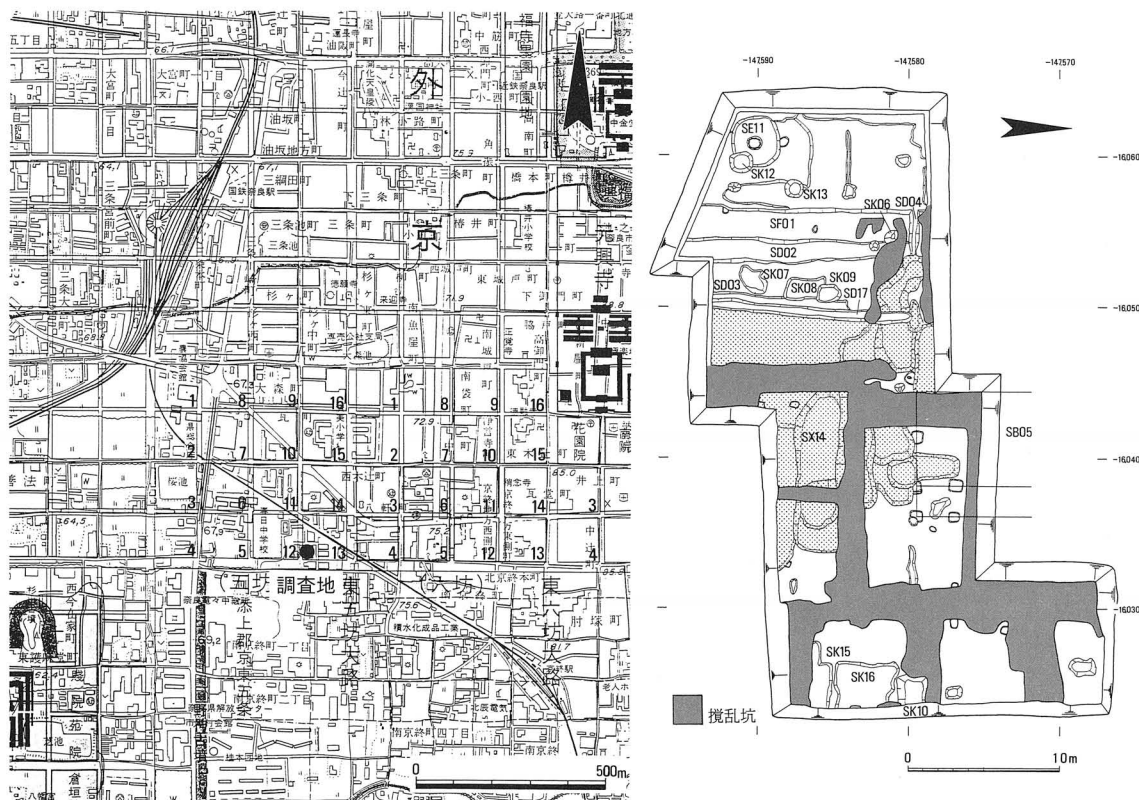


図1 平城京左京五条五坊十三坪調査位置図(1/20,000)
および遺構平面図(1/500)(位置図中の数字は坪の番号)

1は2辺が部分的に残る。一方の角部分は約45度に復原できる。片方の面に凸帯、反対側の面には溝を有する。凸帯幅は3cm程である。凸帯はヘラにより削り出され、のち段部に沿って強めのユビナデを施す。溝は端面から約1.5cm離れた部分に彫り込まれており、深さ約0.8cmで、幅は約0.9cmである。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、中央付近をやや厚く仕上げている。溝のある面はヘラ削りのちナデ調整により平坦に仕上げている。端部の厚さは約4cmである。胎土は精良である。焼成は軟質で淡赤白色を呈する。S X14から出土した。

2は2辺が部分的に残る。一方の角部分は約45度に復原できる。片方の面に凸帯、反対側の面には溝を有する。凸帯幅は3.5cm程である。凸帯はヘラにより削り出され、のち段部に沿って弱めのユビナデを施す。溝は端面から約1.5cm離れた部分に彫り込まれており、深さ約0.7cmで、幅

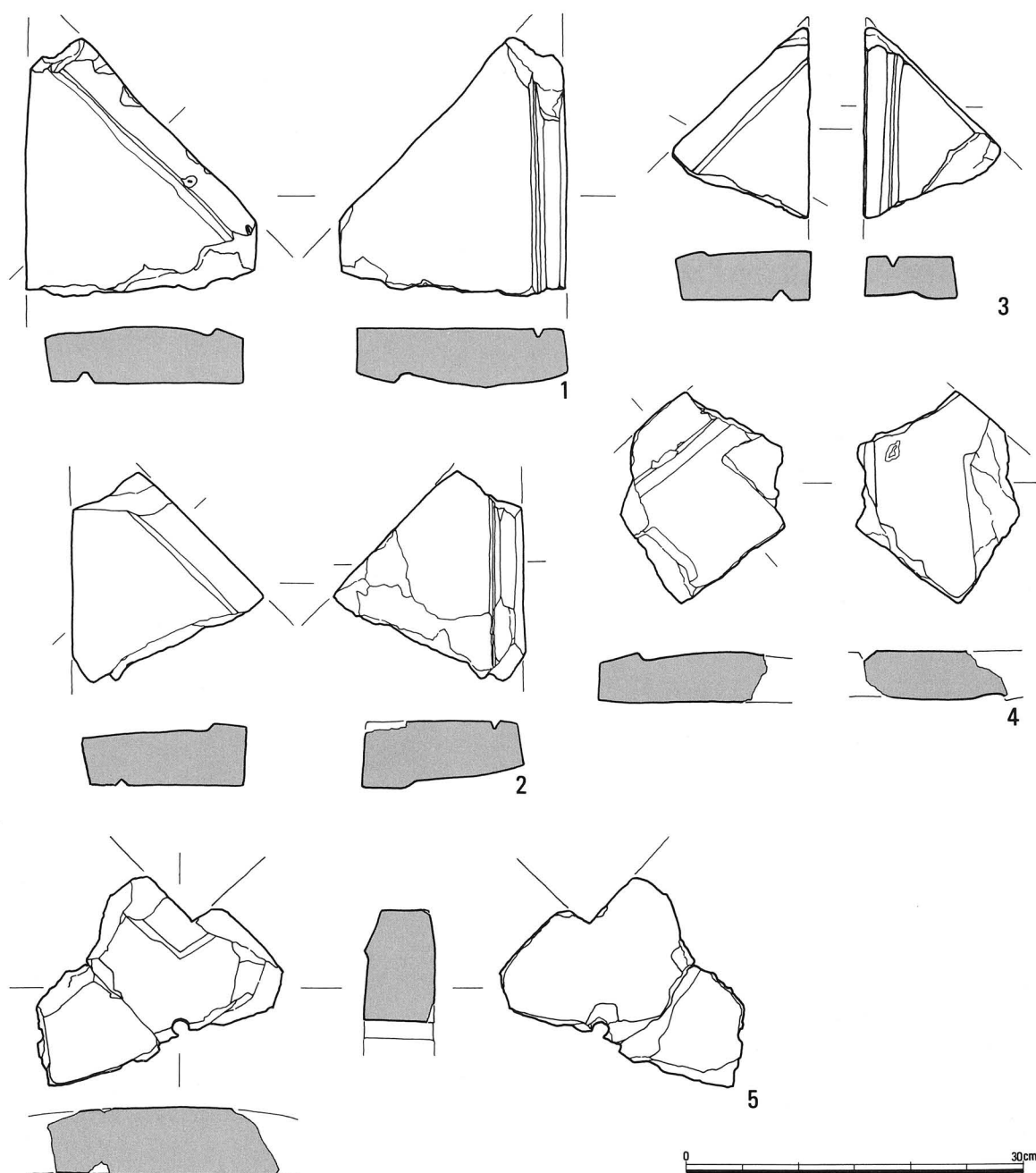


図2 平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品 (1/6)

は約0.8cmである。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、凸帯付近をやや厚く仕上げているが、溝のある面は平坦である。端部の厚さは約5cmである。胎土は精良である。焼成は軟質で内部灰白色、外面淡赤白色を呈する。S K15から出土した。

3は2辺が部分的に残る。一方の角部分は約45度に復原できる。片方の面に凸帯、反対側の面には溝を有する。凸帯幅は2.5cm程である。凸帯はヘラにより削り出され、のち段部に沿って弱めのユビナデを施す。溝は端面から約1.5cm離れた部分に彫り込まれており、深さ約0.8cmで、幅は約1.0cmである。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、端部側をやや厚く仕上げているが、溝のある面は平坦である。端部の厚さは約4cmである。胎土は精良である。焼成は軟質で淡赤白色を呈する。S K15から出土した。

4は1辺が部分的に残る。片方の面に凸帯を有する。1～3と同様に反対側の面に溝を有するとみられるが、溝の片側は欠損している。凸帯幅は3.5cm程である。凸帯はヘラにより削り出され、のち段部に沿って弱めのユビナデを施す。溝は深さ約0.8cmである。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、中央付近をやや厚く仕上げているが、溝のある面は平坦である。端部の厚さは約3.5cmである。胎土は精良である。焼成は硬質で灰白色を呈する。S X14から出土した。

5は片方の面に顎状の凸帯があり、反対側の面は平坦である。中央に直径約1.5cmの円形貫通孔がある。釘穴であろう。凸帯は平面形V字形で、凸帯上では約105度の角度があるが、実際に成形された輪郭を測ると約90度である。凸帯幅は4cm程である。凸帯はヘラにより削り出されている。凸帯のある面はヘラ削りのちナデ調整により、貫通孔のある中央付近が、両端側に比べてやや厚く仕上げている。胎土は精良である。焼成は軟質で内部灰白色、外面淡赤白色を呈する。2片接合資料で、両破片ともにS X14から出土した。

以上5点が本稿で扱う瓦製品である。これらのうち、1～3は形状・胎土・焼成・色調・製作技法が似ることから、同じ性格を持つものとみられる。ただし、1・2と3は45度の角度を残す部分を基準として並べてみると、凸帯と溝を有する面が正反対に位置していることに気付く。4は1～3と形状・胎土・製作技法は似るが、焼成・色調が異なる。これは1～3が、火災などの二次焼成をうけたためとおもわれ、本来は4と同じ焼成・色調であったとみられる。5は胎土・焼成・色調・製作技法が似るものの、形状が異なる。しかし、1～4と同様の凸帯をもつことから、反対側の面の欠損部に溝を有していた可能性が考えられ、これも同じ性格を持つものとおもわれる。次章ではこれら5点を用いて、復原を試みたい。

Ⅲ．瓦製品の復原

1～5が同じ性格のものとする、1・2と3・4を用いて、平面形直角二等辺三角形に復原することもでき、特殊な塼とみることもできる。西大寺では1～4と同様に平面形が直角二等辺三角形に復原されるものが報告されており、特殊塼として分類されている²⁾。しかし、敷塼であったとするならば、片面に凸帯、反対側の面に溝を彫り込む必要性はどこにあったのか疑問である。さらに5が同じ性格をもつと考えると平面形直角二等辺三角形に復原することはできない。

5のV字形の部分の約90度を測り、1～3の一方の角部分は約45度に復原できることから、1と2、3と4の凸帯の接点点が5であることが推測される。そこで5の凸帯の延長線上左に1と2が、延長線上右に3と4が配置できる。以上の操作からこの瓦製品は、片方の面に凸帯をほどこ

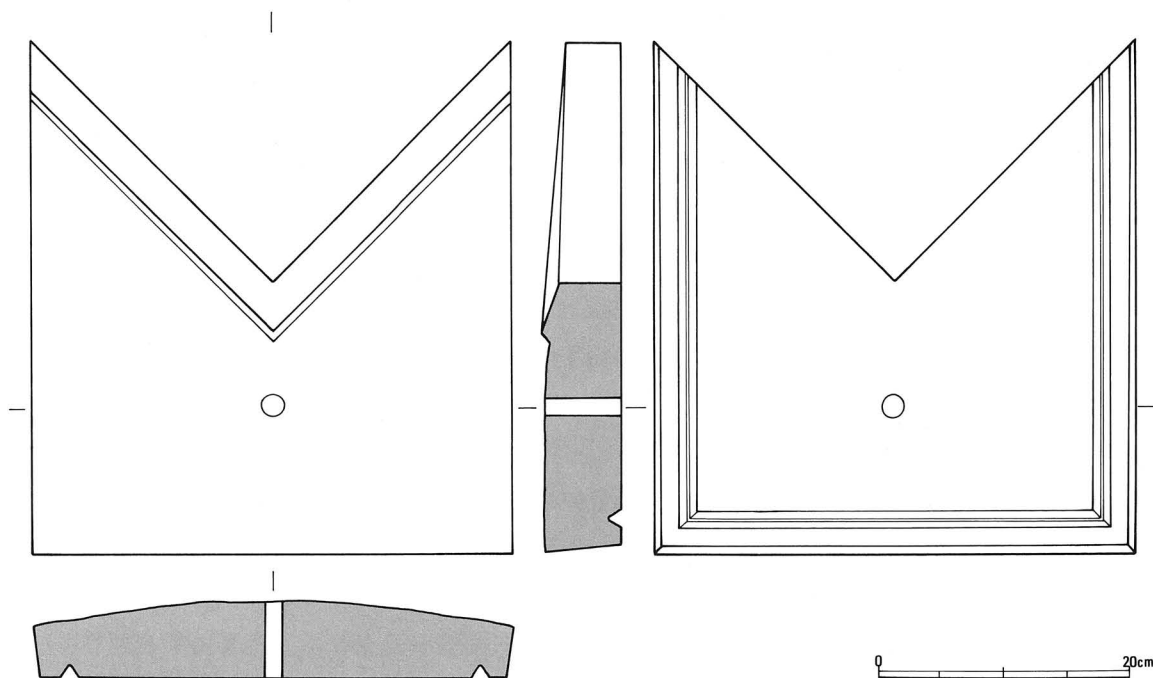


図3 平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品復原図（1/6）

し、その面は両端部から中央部に向かって盛りあがること、反対側の面は平坦で端部付近に溝を巡らすこと、一方が平面形燕尾形を呈すること、ほぼ中心に釘穴を設けることが判る。以上のような特徴から、入母屋や寄棟の屋根などに用いられる隅木の先端を雨水から保護するために用いる蓋形隅木蓋瓦の可能性が高いと考えられる。凸帯のある面が上面で、両端部から中央部に向かって盛りあがる甲盛りは雨水を中央部から両端部へ逃がす水垂れ勾配とみられる。溝のある面が下面で、隅木に密着させやすいように平坦にしているものと考えられる。下面の溝は雨水が下面に廻ってきても、隅木が濡れないように意図した水切りであろう。平面形燕尾形の部分は、垂木の上の横木である茅負の隅角に噛ませるためのものとみられる。釘穴はもちろん隅木に固定するためのものである。

ただし、出土した5点を用いても全幅・全長は明らかにならない。そこで1と5を用い、1を5の凸帯屈曲点に近づけ、できる限り重ね合わせ、最も幅が狭いものとして復原すると、幅は38.4cmと算出できた。全長に関しては、すでに出土・報告されている蓋形隅木蓋瓦を参考にする、全幅の約1.2倍の長さが多いことから、全幅38.4cmに1.2を掛けて全長46.0cmと考え、復原したものが図3である。下面の両溝間である幅内法は31.5cmで、これが隅木幅の上限寸法を示し、茅負の隅角に噛ませる個所から前面の溝までの長さである出内法は18.2cmで、これが隅木の茅負からの出の上限寸法を示す。厚さは甲盛りのため中央部が厚く約6cm、両端部では約4cmである。釘穴に関しては1穴で復原したが、前後に2箇所あったものかもしれない。

古代の隅木蓋瓦に関しては、稲垣晋也氏が集成・分類を行い³⁾、近年では千田剛道氏が平城宮・薬師寺出土品を集成・分類している⁴⁾。しかし、本稿で復原したように上面に凸帯を設け、下面にかかりをもたず、溝を切った蓋形隅木蓋瓦は無い。しかし、平城宮内から出土している千田分類平城宮B型式は似ている。ただし下面にかかりをもっており、そのかかりの上に溝を切ってい

るものである。復原したものは平城宮B型式のかかりを省略したものとみることができようか。

Ⅳ. おわりに

以上述べてきたように左京五条五坊十三坪出土瓦製品が、蓋形隅木蓋瓦であると考えたが、おわりに、どこの建物で用いられたものかを考えてみたい。

まず、この蓋形隅木蓋瓦の製作年代であるが、これが江戸時代の土坑から出土したものであることは前に述べた。しかし、一緒に大量に出土した軒瓦はすべて奈良時代以前のものであることから、調査担当者もこの土坑は、近辺から集められ捨てられた瓦の廃棄土坑とみており⁵⁾、蓋形隅木蓋瓦も奈良時代以前の可能性が高いと考えられる。

調査地での奈良時代の遺構には十二・十三坪境小路東側溝（S D02）、十三坪西辺を区画する築地などの雨落と考えられる溝（S D03）が検出されている。このことから、蓋形隅木蓋瓦は築地塀の屋根に使用された可能性も考えられる。しかし、隅木蓋瓦は切妻屋根と考えられる築地塀には必要無いものであり、築地塀用とするには疑問が残る。

そこで、今回出土した蓋形隅木蓋瓦の大きさに注目してみる。過去に報告されている蓋形隅木蓋瓦を集成したものが表1である。これをみると、今回復原した蓋形隅木蓋瓦は、全幅・全長・厚さともに大きい部類に入ることがわかる。今回の復原は前に述べたとおり、もっとも小さかったと仮定しての復原であり、実際はもっと大きいものであったかもしれない。このようなことから、使用された建物は平城宮内の主要瓦葺建物、または寺院の主要瓦葺建物に匹敵する規模であったと想像され、京内の一般の宅地で使用されたものと考え難い。

では調査地周辺で大規模な瓦葺建物が想定される遺跡はどこに求められるだろうか。『随心院

番号	出土遺跡	全幅	全長	厚	幅内法	出内法	備考	参考文献
1	大和 平城宮第一次大極殿院	(40.0)	(46.5)	8.6	*(37.0)		かかりに花雲紋、千田平城宮A型式	1・2
2	大和 平城宮第二次内裏・朝堂院地区他	(35.4)	(38.1)	3.1	*28.0	*22.0	千田平城宮B型式	2・3
3	大和 平城宮第二次大極殿・後殿・朝堂院地区	(43.0)	(50.0)	2.5	(29.5)	*(27.0)	千田平城宮C型式	2・4
4	大和 平城宮玉手門地区	(28.6)	(31.0)	*3.0	(25.4)		千田平城宮D型式	2・5・6
5	大和 平城宮第二次大極殿地区			3.8				4
6	大和 薬師寺南大門地区	34.1	39.1	*3.6	31.2	32.3	かかりに花雲紋、千田薬師寺A型式	2・6・7
7	大和 薬師寺西僧房地区	*(34.0)	*(46.0)	*3.0	(24.4)	(25.2)	千田薬師寺B型式	28
8	大和 薬師寺西僧坊・西塔地区			6.2			千田薬師寺C型式	2
9	大和 薬師寺金堂地区	21.9	*(22.5)	*1.7	15.5	8.5	千田薬師寺D型式	2
10	大和 薬師寺講堂地区	*(33.5)	28.8	*1.7	*(25.7)	*(24.5)	千田薬師寺E型式、平安～鎌倉時代頃か	2
11	大和 薬師寺西面回廊地区			*2.5			かかりに連珠紋、千田薬師寺F型式、鎌倉時代	2
12	大和 伝薬師寺出土品	34.7	39.1	4.0	30.0	32.8	かかりに花雲紋、紋様は6とは上下逆	6・9
13	大和 興福寺食堂地区	(29.8)	(36.4)	5.0	(26.0)	25.2		6・10
14	大和 大安寺北西中房地区			3.0				11
15	大和 西隆寺東門地区	29.0	40.0	6.1			軒平瓦(6739A)の転用品	6・12
16	大和 平城京左京五条五坊十三坪	(38.4)	(46.0)	6.0	(31.5)	(18.2)		
17	大和 法隆寺西院地区	(35.8)	(42.6)	3.0	(26.7)	*(16.3)	かかりに唐草紋	6・13
18	大和 法隆寺東院地区	(30.0)	(39.0)		*(24.8)		かかり正面に鬼面紋、かかり側面に唐草紋	6・14
19	大和 藤原宮南面中門地区	34.0	35.7	2.8			平瓦の転用品	6・15
20	大和 川原寺			2.5			平安後期か	6・16
21	大和 尼寺北廃寺							17
22	山城 六波羅蜜寺	(24.0)	(30.5)	3.6	(17.8)	(11.3)	かかりに両珠金錦紋、平安後期	6・18
23	山城 六波羅蜜寺	(24.0)	(33.5)	3.6	(18.1)	(15.1)	かかりに両珠金錦紋、平安後期	6・18
24	山城 山城国分寺塔地区	30.2		3.0	23.7	(21.3)		6・19
25	摂津 難波宮大極殿・内裏地区			4.5				6・20
26	但馬 但馬国分寺塔地区	32.3	38.7	3.9	27.3	15.8		6・21
27	飛騨 飛騨国分寺瓦窯		47.7	2.4				6・22
28	下野 豊岡遺跡			5.4				6・23
29	下野 下野国分寺			3.0				24
30	下野 下野国分寺			3.3				24

表1 蓋形隅木蓋瓦計測値表 (単位cm)

凡例

- 1. () 内の数値は復原値
- 2. *印は文献および図をもとに筆者が計測した数値
- 3. 番号16の資料の幅内法・出内法は水切り溝から計測

文書』の天平勝宝8歳(756)の「孝謙天皇東大寺宮宅田園施入勅」⁶⁾や宝亀7年(776)の「佐伯宿禰今毛人同真守連署送銭文」⁷⁾の記載から、調査地東側の左京五条六坊十一・十二・十三・十四坪と五条七坊四坪には佐伯院(香積寺)が、左京五条六坊五坪に葛木寺が、また佐伯院以前には左京五条六坊十四坪に、大安寺の井園があったことが考定されている⁸⁾。

佐伯院は、同じく『隨身院文書』延喜5年(905)の「佐伯院附属状」⁹⁾の記載から、宝亀7年に起工、延暦4年から5年にかけて(785~786)完成したと考えられている¹⁰⁾。なお「佐伯院附属状」には、佐伯院金堂とおもわれる堂舎が、「五間檜皮葺堂舎壺宇」と記載されている。もちろん当初から瓦葺きではなかったと断定されているわけではない¹¹⁾のであるが、金堂すら瓦葺では無かったのではないかと思える記事である。また調査地で出土した軒瓦のうち、年代が明らかなのは、すべて起工された宝亀7年以前のものである。このようなことから調査地出土瓦類が佐伯院で使用されていたものであった可能性は低いと考える。

葛木寺の創建年代は明らかになっていないが、『随心院文書』から天平勝宝8歳には存在したものとみられる。また『続日本紀』宝亀11年(780)の記事から、大雷による火災のため、新薬師

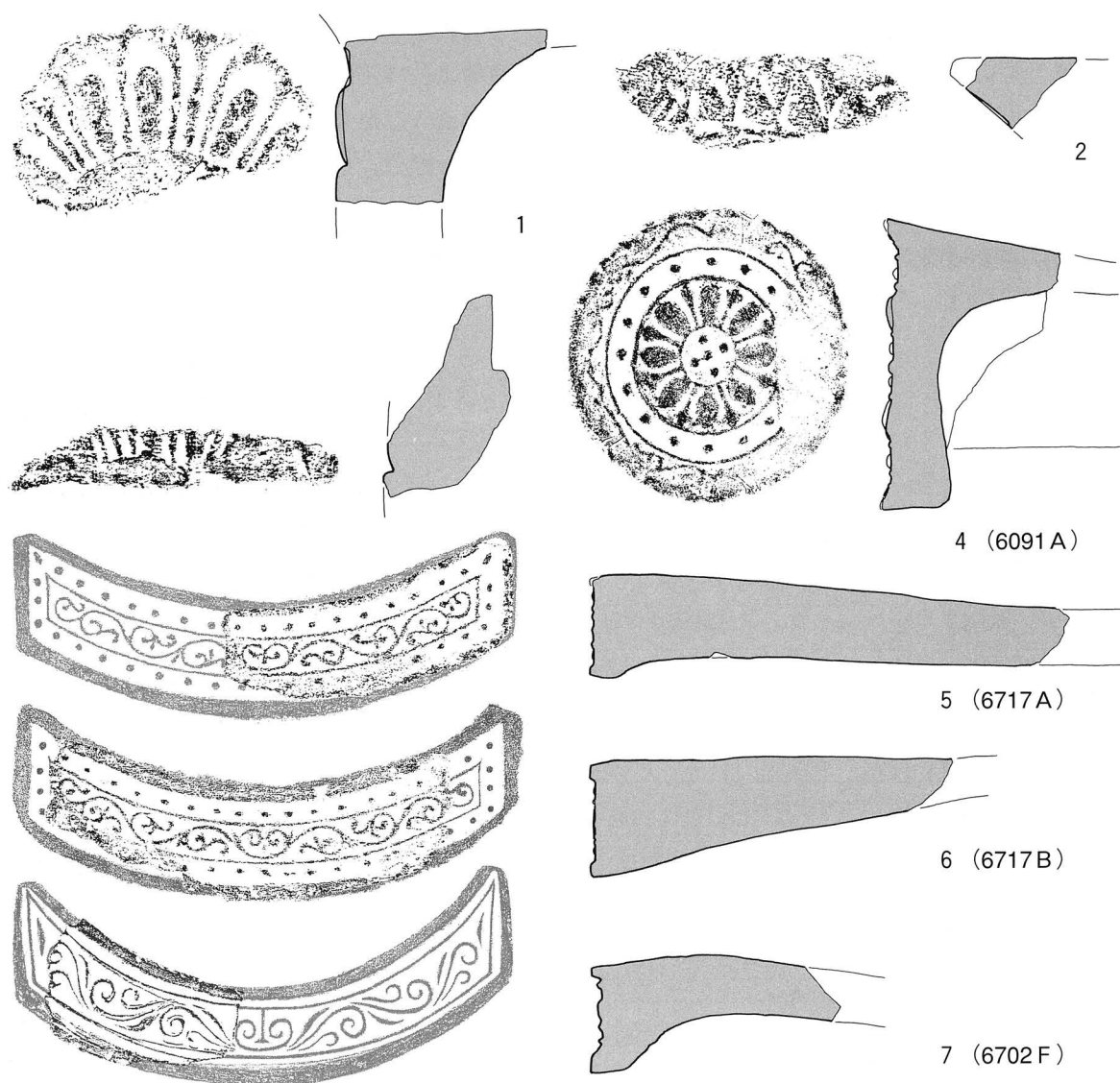


図4 平城京左京五条五坊十三坪出土軒瓦(1~3は1/2、4~7は1/4)

寺西塔とともに葛木寺の塔や金堂が焼失したことが判る。蓋形隅木蓋瓦だけでなく調査地出土瓦類には火災などによる2次焼成をうけたものが多いことは、この火災の記事と比べて注目される。また、調査地からは6702Fが出土している（図4-7）が、これは飛鳥の葛城寺に比定されている和田廃寺から同範品が出土している¹²⁾。他に調査地からは和田廃寺XXI型式によく似た軒丸瓦片が3点出土している（図4-1～3）。小片の為、同範とまでは断定できなかったものの、¹³⁾上記したことも考え合わせると、飛鳥の葛城寺＝和田廃寺であり、移ってきたのが平城葛木寺で、調査地出土瓦類は平城葛木寺が廃絶後、本調査地の土坑に廃棄された可能性は考えられる。

大安寺井藪に関しては、どのような建物があったかの詳細は不明である。ただ、調査地で出土した軒瓦のうち、最も量的に多いのは6091A-6717A・B（図4-4～6）の組み合わせで、6091A-6717Aはまず大安寺僧房用として製作・供給された後、左京五条五坊十三坪に供給されたものであることは別稿で明らかにした¹⁴⁾。このように大安寺と関係の深い軒瓦が多いことから蓋形隅木蓋瓦も大安寺井藪内の瓦葺建物で使用されたことも考えられる。

あるいは葛木寺・大安寺井藪内建物両所の瓦が混在して調査地で出土したものかも知れず、現時点ではいずれのものかは明らかにできないが、葛木寺・大安寺井藪の両遺跡とも蓋形隅木蓋瓦を用いた場所としては有力であると考えられる。

今後、調査地周辺で調査が進むに従って、蓋形隅木蓋瓦の使用場所だけでなく、上記した寺院の様相が解明されることを期待してひとまず小稿の筆を置きたい。

なお、独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部の千田剛道氏には隅木蓋瓦について、独立行政法人奈良文化財研究所飛鳥・藤原宮跡発掘調査部の花谷浩氏・西川雄大氏、奈良市埋蔵文化財調査センター宮崎正裕氏・山前智敬氏には左京五条五坊十三坪の出土軒瓦について、助言・協力を頂いた。文末ではありますが、記して感謝致します。

註

- 1) 松浦五輪美・宮崎正裕「平城京左京五条五坊十三坪の調査 第274次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』奈良市教育委員会1998
- 2) 小澤毅「第3章遺物 3瓦塼」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所1990 掲載の特殊塼Ⅱ類
- 3) 稲垣晋也「古代の隅木蓋瓦」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』古代を考える会・藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会 1983
- 4) 千田剛道「平城宮の隅木蓋瓦」『奈良国立文化財研究所年報1999-I』奈良国立文化財研究所1999および千田剛道「薬師寺の隅木蓋瓦」『奈良国立文化財研究所年報2000-I』奈良国立文化財研究所 2000
- 5) 註1と同じ
- 6) 『大日本古文書』4-118～121p
- 7) 『大日本古文書』23-615～616p
- 8) 福山敏男「葛木寺と佐伯院（香積寺）」『奈良朝寺院の研究』高桐書店 1948、および角田文衛『佐伯今毛人』吉川弘文館 1963 他に佐伯院・葛木寺の所在については、大井重二郎『平城京と条坊制度の研究』初音書房 1966では佐伯院を左京五条六坊五・六・十一・十二・十三坪に、葛木寺を左京五条六坊四坪とする。小稿では福山・角田両氏の説に従った。
- 9) 『平安遺文』1-242～243p
- 10) 角田文衛『佐伯今毛人』吉川弘文館 1963
- 11) 註6と同じ
- 12) 2001年8月31日、奈良文化財研究所飛鳥・藤原宮跡発掘調査部にて、花谷浩氏・西川雄大氏・山前智敬氏に立ち会って頂き、和田廃寺ⅦF型式（6702F）と実物照合を行い、同範であることを確認した。なお、和田廃寺・左京五条五坊十三坪出土6702Fはともに、瓦当面に木目痕が明確に確認できる段階のものである。
- 13) 図4の1～3は、胎土・焼成・色調が同じであり、同型式と思われる。2001年8月31日、奈良文

化財研究所飛鳥・藤原宮跡発掘調査部にて、花谷浩氏・西川雄大氏、山前智敬氏に立ち会って頂き、和田廃寺 XXI 型式と実物照合を行った。図 4-1 に関しては和田廃寺例に間弁の根元が向かって左に寄る個所が 1箇所あり、1にもそのような個所があったため、その部分で比較した。隣接する弁の子葉の形状も似ており、異範とする根拠は無かった。図 4-2 に関しては、和田廃寺例とよく似た面違鋸歯紋であったが、小片のため位置を特定できなかった。図 4-3 に関しては、あまりにも小片のため比較できなかった。以上図 4-1 に関しては異範とする根拠は無かったものの、同範かどうかに関しては、さらなる良好資料を待ったほうが良いとおもわれる為、ここでは同範とは断定しない。

- 14) 原田憲二郎「記号「}」が押捺された「大安寺式軒瓦」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』1999

表 4 参考文献

- 1 『平城宮発掘調査報告 XI』奈良国立文化財研究所 1981
- 2 千田剛道「平城宮の隅木蓋瓦」『奈良国立文化財研究所年報1999－I』奈良国立文化財研究所 1999
- 3 『平城宮発掘調査報告 XIII』奈良国立文化財研究所 1991
- 4 『平城宮発掘調査報告 XIV』奈良国立文化財研究所 1993
- 5 『平城宮発掘調査報告 IX』奈良国立文化財研究所 1978
- 6 稲垣晋也「古代の隅木蓋瓦」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』古代を考える会・藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会 1983
- 7 「薬師寺南門付近の調査」『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1982
- 8 『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1987
- 9 『天平の地宝』奈良国立博物館 1961
- 10 『興福寺食堂発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1959
- 11 「(1) 北西中房の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書(第1分冊)平成9年度』奈良市教育委員会 1998
- 12 『西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所 1993
- 13 「法隆寺の調査 4 現回廊地区」『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1981
- 14 「法隆寺境内の調査 1」『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1980
- 15 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I』奈良国立文化財研究所 1976
- 16 『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1960
- 17 『かしばの文化財 9 尼寺廃寺の瓦』香芝市二上山博物館 1999
- 18 『六波羅蜜寺民俗資料緊急調査報告書(第2分冊)』元興寺仏教民俗資料研究所 1971
- 19 「恭仁宮跡昭和53年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1979』京都府教育委員会 1979
- 20 『難波宮址の研究 研究予察報告第6』難波宮址顕彰会 大阪市立大学難波宮址研究会 1970
- 21 『但馬国分寺跡 I』兵庫県城崎郡日高町教育委員会 1975
- 22 『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告』高山市教育委員会 1975
- 23 『栃木県岩舟町豊岡遺跡発掘調査報告書』日本窯業史研究所 1976
- 24 『下野国分寺 XII』栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997